

女皇クレオパトラ：論説

著者	柳田，加藤次
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 5 8
ページ	3 3 - 4 8
発行年	1915-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6492

知あれ。人は須らく現代を超越せざる可からず。樗牛に至つては正に此語の色讀者なるを！あはれ悠々として江山の翠誰がために永へなる。條々として長江の水誰がために盡きざるか。願はくば彼に譲るに其の細片を以てせよ。吾人は彼に於て力強き信念の叫を聞くを得れば也。實相鋤に曰く

「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩に定まりなば釋尊の弟子たる事豈に疑はんや」と
と此の一言こそ彼日蓮が本地妙悟の居住を証したるの明文也。彼樗牛も亦此處に生き、此處に醒め、久遠永却の生命に感觸する人となり畢はんぬ。吁々亦何等の光榮ぞや。

(四月廿日稿)

女皇クレオパトラ

一部二年乙

柳田加藤次

見渡す限り渺漭と

席の千仞今荒れて

眠りも戀も醒め果てぬ

五彩彩る晨樓の

燃ゆる夕日の紅染めて

痕も流轉の泡沫や

タウタカ

次第に籠むる霧の海。

ローマの光榮を宣る如く、

終焉の幕今近し。

緑を溶かすわたつ海の

夢安らげき白鳥の

見よ大空の薄霞

装ひ天の一方に

崩れて波に入りし痕

漣瀾は眠る花に似て

あゝ、アケチエウム暮の色。

沈む夕日のエザプトの

偲ふも哀れ涙哉、

艶を集めし春衣

トレミー宮の夜半の夢、

其の會合を何ぞ見し。

更に迎へし埃及の

紅粉紫簾嬌艶の

嘗て浮びしレシドナスや、

羊景よ戀よ今何處、

伏しし英雄血の刃

滅ぶ埃及後に見て、

毒蛇ナイルノ底深き

最後を飾る詩ぞや見ん、

焔の舎に我死せば、

未だ春淺き埃及の

紅閨翠帳香も深み

薄月洩るゝ深宮の

春よ夢なりアントニー。

微笑輕く掉さして、

花環金冠ターレスの

逝きし英雄墓の前、

落暉は今ぞ沈むなり、

二千年の光榮の、

「長き恨」を紅の

顧みれば邈乎たり東西幾千の春秋、去りては來り、來りては逝く其の悠久の長き姿よ、國敗れて山河あり、城春にして草木深し。戀しい哉亡國の春、花に對して紅涙を灑ぐ豈に獨り詩人杜甫のみならんや。浩浩乎として平沙限無き所、縈々乎として山河襟帶する所、斷草將に枯れんと欲して只蕭條たる悲風千里懷史の跡を吊ふ時、李華が萬斛の血は躍り千斛の涙は湧きて凄慘たる「古戰場」の賦はあるにあらずや。思へば定めなきは變轉として遷り行く人の世なる哉。

嘗つては花影燦々として高欄に酣なる春殿の夕、紅衣錦繡の美を一夕の臺に集めつゝ輕く亂舞の袖を翻へせ

しの土地、忽ちにして煙塵馳突の修羅の巷と化し、今は只茫々たる青草の蔭、廢墟に傾く弦月の色もわびし。
さればナイルの河は今も靜かに、綠濃き椰子樹の蔭に稜錐塔の影を寫し、砂を抱ける女面獅身像の怪貌は、吹
き荒む大陸の風に嘯きつゝ、五千余年のこの國の絢爛の榮を語りげに見ゆれども、今は只茫漠たる廢都の面
影、羈人杖を止めねば流轉も悲し、泡沫や、さはれ、千古の歴史の上に悔恨せらるゝは、彼の曠世の客色、ク
レオパトラの華やかなる夢の、繰り返し繰り返しても猶ほ纏綿として盡きざる物語にてはあらざる乎。

豊けき曲線もて彫まれし大理石に殘す美人の面影よ。惚焉たる眸と練絹の如き金髪の色に溢るゝ華やかなる
藝術の香と、悲慘なる戯曲の色彩と濃艶なる詩歌の韻律の奇しき調和とを見よ。實にや埃及二千年の光榮は
女皇が紅恨三十有余年の短かき夢に包まれてうらはかなくも散り果てし紅花一輪。積もる東西の頁に、濃艶
の色彩を飾るべく、永久の名残りを止めたる美しき記念にてはあらざる乎。假令、芳魂一度去つて歸らず、艶
花再び地に萎して開かずと云は言へ、彼の女が三十余年の赫燦たる生涯の中には、奢るローマの興隆の歴
史も、赫々たる英雄の功業も、物悲しき世界の古國埃及の滅亡も、或は倏忽として焰ゆる火の如く、或は倏
忽として消ゆる煙の如く、奇しき運命の纏れたる絲を織るにあらずや、あはれ、議場に悲憤の紅血を染めた
る大シーザーの悲劇も、ローマを燒きしローマ市民の熱狂も、火の如きアントニーの熱辯も、ローマ勝つか
埃及勝つか、乾坤一擲アクチウムの海戦も、悲愴極まるアントニーが最後の大背景にも、誰か知らん、炯
娜なる異郷の紅花一輪、世にも稀なる女皇の明眸と華奢なる纖手とが其の裏面に潜伏せりしならん事を、若
し夫れ、花の如きローマ帝國の覇者、威權赫々たる英雄二人を、只一双の燃ゆる瞳もて恍惚たらしめ、其の
纖弱なる細手に弄びし埃及女皇クレオパトラの妖艶をしてローマ史の一頁より削除せんか、然らば其處に、ト

レミーの深宮、英雄佳人相携へたる伉儷の春夢なく、花の如く酔ひし、アントニーの詩歌も、悲慘なる終局もなく、歴史は雷に宏壯華麗なる、ローマ都の建築の殘骸をのみ残したらんを、否若しアントニーにして彼の女の容色に惑溺せざりしならば、遂にローマの歴史は其の後半の面影を一變せしめしならんを、美人は遂に傾國の容具なるか。

遮莫我は詩歌を愛し、戯曲を愛す、詩歌に美しき埃及の風光を愛し、戯曲に潢溢せる女皇の權花一朝三十年の華やかなる生涯と、更に其の觀照として横はれるローマの榮ある歴史と埃及の悲しき滅亡の姿とを偲ぶ、哀れ物悲し、世界最古國埃及の滅亡の跡よ、女皇クレオパトラの果敢なきローマンスよ。

伉 儷

曠古の英雄亞歷山の馬蹄に掛けられし其の憂々の響の底より翕然として湧き出でし埃及の文華。花の如きギリシャの藝術と詩歌とを縦に、春の如きローマの富と榮を經に織りなされたる亞歷山の榮華もあはれ其の絶頂と思はれし、トレミー王家治世の華やかなる末つ方、時は紀元前六十九年の春猶ほ淺き頃なりき、百花繚亂と咲き亂れたるトレミー宮殿、燃ゆる陽炎に永劫の春を疊める内苑の香に誘はれて、胡蝶の如く呱呱の聲を擧げたる、これぞ我が艶麗無双なる女皇クレオパトラの出現の序幕なる、今は荒漠たる埃及の地、沙漠の中に詩は生れぬ、世界の文豪沙翁が雄麗なる情緒も湧きぬ。さるにても數奇なりし彼女が生涯の運命の渦巻よ、不可思議なる埃及の習慣に依りて生れながらにして其の弟たるトレミー第十二世の王妃たらざるべからざりき。時に王僅かに十六歳、皇后芳紀正に二十一歳、さらでだに春院空しうして閑け行かんは長き乙女の恨みなるべきに況してやナイルの岸に咲く花の精をあつめて天が作せる玲瓏たる美容を抱きながら僅か十

六歳なる弟王十二世の膝下に侍せんとはする、何等の運命の諧戯ぞ。あはれ、雨にや惱む梨花一枝、それよりも更に更に濃艶なる女皇が胸中の悶々の情は、其の金髪の渦巻よりも更に更に深長なるものありき、然れども天の配劑は實に巧妙なりき、時偶々宮庭の紊亂内訌あり。今や彼女は、昨は弟にして而も良人たりしトレミー十二世に對して、今日は仇敵として劒戟の間に見ゆるべからざりき。

然り埃及の天地は今や帝王、女皇の二派に分れて兵馬の間に鎬を削らんとす。時なる哉、女皇にとりて偉大なる救助者は、忽焉として天の一角より現はれ來りぬ、救助者とは誰ぞ、赫々たるローマの威權と世界の渴仰とを一身に集めたる彼の千古の英雄ユリアス、シーザー其の人ならむとは。骰子は投せられたり、滔々たるルビコンの奔流を一鞭南して時の元老院を一舉にして屠り、三領政治の基礎漸く成りし、シーザーは今や新銳なるローマ軍を率ゐて、大舉小亞を粉碎せんとするの途次、先づ埃及も掌中に收めざるべからざりき。實に此の時なりき、女皇クレオパトラよりの乞援の使は到りたるなりき。シーザーは之を諾しぬ。斯くて精銳なるローマ軍は潮の如く埃及に侵入し、昨の帝王トレミー十二世は猶ほ紅顏十六歳を一期として、敢なくも溺死しぬ。

あはれ思ひも設けざりし深宮の會合よ。三春の行樂をこゝに集めてし、トレミー王宮の陸離たる會宴。絃歌全くあと絶ゆれば、微笑^{ホエ}むが如き春月只蕩然として、乾坤の全てを靜かなる帷幕もて蓋はんとするのみなるに、蘭麝薰する紅閨翠帳の裡、結ぶ英雄の夢やいかに、妖艶天女の如き女皇の美容には、嘗つてはローマの元老院を一劍の下に脅嚇せる英雄シーザーも只身神恍惚として、未だ春知らぬ少年の如く、嘆美の心願^{ワガ}はしつゝ、甘き女皇の軟かき呼吸に觸れぬ。あはれ何等の奇しき會合ぞ。一つは赫々たるローマの霸權を一身に集

めたる當時の英雄、一つは媚々たる世界の美を一身に集めたる埃及の紅花、飽かぬ歡會は猶ほ飽かねども勢は遂に伉儷の平和なる夢を許すべからず。久しく秣に飽きし馬に跨がり、久しく平和に狎れし軍隊を従へて、彼が靜々と、トレミー宮を立ち出で、暗雲漠々る小亞の空に向ふ時、知らず、英雄と美人の盡きぬ後朝の永き恨みは。

時代の翻弄

斯かる間にも時代の進行は旋轉しぬ。小亞の猖獗を一定して威風堂々、ローマに凱旋せしシーザーの權威と光榮とはいかなりしぞ。緑なせるローマの天へ、此の赫々たる偉勳を囁くが如き宏莊なる凱旋門の高さよ、蟻の如く彼が脚下を圍繞して、ざわめき蠢動する群衆の讚賞の聲よ。アントニーは恭やしく立つて彼に燦爛たる金冠を捧げたるも、想ふべし、彼れが此の光榮の頂に立てる時、其の時既に彼の背後には彼が隆々たる權勢を嫉む共和政府と、彼が野心を慮れたる親友ブルータスの凶暴殘忍なる刃は潜み居たりし也。時は紀元前四十四年、あらゆる世界の富、世界の美、世界の榮華を此處に集めて、薔薇の花は雨と降る、美しき平和と華やかなる歡樂の幕に包まれて、世界の女王ローマの都は靜々と明け行く奇しき黎明の曙光に、美しき姿を現はしたれども、世界の英雄、シーザーは其の日殺されぬ。見よや、美しき月桂の冠を戴きて議場に立ちしシーザーが、「ブルータス爾も亦」、其の終焉の一聲のいかに凜として沈痛の響を残せしや。あはれ昨は權勢一代を震撼せしめし曠世の英傑、今は紅血に泥れたる慘骸を議場に曝らす。さわれ時代は斯かる偉大なる英雄の横死を默視する能はざりき。見よや、曠野を吞まんとして渦卷き來る氾濫の如き群衆を制しつつ、鮮血淋漓たるシーザーの死骸を指しつつ、或は慟哭の熱涙を拂ひ、或は悲憤の聲涙を吞みて、壇上に立ちし、千古

の雄辯、烈々火の如きマークアントニーが追悼大演説の壯觀を。死せる英雄の淋漓たる血と、生ける英雄の暗然たる涙とを見て昂奮せる市民は沸然として起ちぬ。焼けよ、カーシアス、ブルタースの家。屠よ殘忍兇徒の輩。燃ゆる炎々たる紅の炬火振り翳しつゝ、潮の如き渦卷去りし市民の後見送りし後、高き高き、天の一方を仰いで莞爾として微笑せしマークアントニー。第二回の三頭政治は斯くして成りぬ。

ターレスの美景

因果は廻る小車の、颯て廻り來るは女皇クレオパトラが身の上。愛人シーザーが斯かる刃に齧られしとも知らで、ローマ市街の淡綠、眺めゆかしきタイバー河畔、宏莊華麗なる大シーザーの別莊に、美しき享樂の夢の如き日を送りぬたる彼の女が、一朝にして悲報を耳にせし時、あはれ、彼の女が愁嘆と失望の紅涙はいかばかりなりけん。榮華を極めしローマ帝王の皇后、否世界の尊嚴を一身に集むる世界の帝王の皇后としての位置も權位も失墜しぬ。愛寵を恣にしたる戀も破れぬ。ローマよりは逐はれぬ、孤影蕭條として故國に歸つて、再び幼弟トレミー十三世の配偶者たらざるべからざる彼女。あはれ蕭々たる雨に惱む海棠の、それにも勝りて美しき、肉体を抱きながらシーザーの没後を、トレミーの深窓の裡に孤獨を悶わざるべからざる彼女、夜々の嘆は纏綿として盡きざる彼女、けに此の時なりき、美しき妖艶無双なる花に抱かれて、颯て彫まれん自己の破毀の運命とも、知るや知らずや、磊落せる雄姿、烈々火の如き熱情と勃々火の如き野心を抱ける若きローマの英雄アントニーは突如として來り、恍惚として彼女の腕を擁せし也。

假令、元老院を一舉にして斃し、シーザーの權勢は無くとも、我が熱血の如き雄辯は我にローマの大權を齎らして綽々たり、三頭政治の二隻たる彼れ、オクタヴィア何者ぞ、レピズス何者ぞ、彼れや大シーザーが一

裨將のみ、其の威望、其の軍隊を率ゐて彼亦再び小亞討伐の途、一喝速に埃及を降さんの心より其の抑聲、シ
レシヤの地より使を馳せぬ。女皇速に來りて我に謁して降伏の約を爲せよ。然らば我が猛々たる兵燹を免る
べし、と。あはれシーザーを墓に埋めて幾年か、其の紅涙の痕すら未だ飽かざるに、今や女皇は會心の笑を
洩らして此の使を勞しぬ。あらゆる天界の精美と地上の婉麗とを凝らせる御座船の用意は成りぬ。黄金の延
金もて作られたる艫は燦々として綠せる波に映ひ、紅紫の絹もて作れる軟かき帆は艶かしき微風を孕み、白
銀のオールはゆるやかに綠波を搏ちて、今や御座船は、流れ静けきシドナスの清澈を碎いて下らんとす。

肅々として起る其の天樂よ、音律よそは何等の杖ぞ、陸離たる船房キヤビンよ甲板デッキよ、そは果して何の爲の装ひぞ。
莊嚴に垂れたる金光まばゆき天蓋の蔭、紅粉紫黛の色も濃く、焉然として坐せる女皇の容色よ、そは果して
何の爲の媚ぞ。恐るべき外交の術とや。英雄アントニーを掌中に弄して、落暉に沈む埃及を救はん爲とや。
さらば美貌の裏面に凄う光る鋭き武器を見よ。鋭き武器の中にもやさしき涙の情調の戯曲を見よ。あはれ静
けきターレスの岸よ、シドナスの美しき流れよ。其處に紅の霓裳舞ひ、其處に管絃の音絶へ果て、幾十の世
紀の跡ぞ。

ローマの英雄と、埃及の女皇の美しき戀の囁は其處にて囁かれぬ。見ずやローマの英雄の光榮ある常勝の劍
も、絶世の美人が一滴の涙、一双の微笑には過ぎざりしを。吁々、時代の翻浪。英雄と美人とを載せて雄大
にして莊重なる大悲劇の舞臺ステージの海に奔流する事の何ぞ屢々なる。

再來の春

策士は遂に策の爲に斃れ、美人は遂に美の爲に憂悶す。よしや、シーザー一度去りたれば、片鶯の夢圓かに

結ばれず。淡れ行く弦月斜に、トレミー宮殿の窓に落ちて、孤閨寂びしき美人の半顔を照らす時。春院徒らに更けて花影欄に酣なるを、暁日早く盡きんとしては、有緊、愁寂の中、悶々の情、猶ほ悶々として止む能はざるものありしとは雖、山影水姿艶麗の美をあつめて、女皇ターレスの地に於て、アントニーと會見せしものは、嘗にそれのみにてはあらざりし也。妖艶無雙なる薔薇の刺、女皇の策は鋭くも美しき美の極なりき。世界の古國埃及興廢の運命は纖弱なる女皇の一顰一笑の中に在りしには非ずや。

颯々として亂るゝ金髪、其の星の如き明眸一度微笑せんか。埃及の春は猶ほ永遠の樂土なるべく、濕める眸一度ローマの屈辱に憤つて泣かんか、埃及の豊けき國土と長き歴史とは一炬にして燒き去らるべきや明也。國に一滴の紅血を饉らず、炎々たる兵燹に良民の夢を破らしめず、纖手能く英雄の心血を蕩かして國難に代らんとの大願、女皇の胸にはアントニーを一見せざりし以前より、此の政策を潜め居たるなりき。

假令、彼に三軍を叱咤し、金城湯池を屠るの勇有りとも、其心木石にあらず、其の身偶像にあらず、奚ぞ、我が花の如き電光の一瞥に堪ふるを得んや。我れ既に之を経験せり。彼の大英雄シーザーの嚴肅不羈を以てすら、我が前には只恍惚として兜を脱ぎぬ。然るを彼れアントニー何者ぞ、彼亦我が掌中に收めて傀儡たらしめん事一茶飯事のみと、躍る女皇の美しき胸には只高く尊き美の絶對の誇と、勝利を豫期するが如き鼓動の打ち騒げるのみ。而して美は遂に英雄を征伏せり。花の如き美貌、眞紅の唇の前には驕る英雄の意氣も、劍も鞭も、何等の權威無く價值無きものか、見よ鐵騎歩甲を擁せるアントニーも、あはれ流水風情あるターレスの岸に於て、此の妖艶なる女皇の一瞥に遇ひては忽ちにして心溶け肉震ひ、洵然として酔ひ、惘然として自失し、惜しや、彼が半世の功業も名譽も塵埃の如く抛つて顧ざりしにあらずや。

あはれ麗はしき美の權化、其の華やかなる外交に依つて彩られたるローマと埃及とを結び付けし情緒ある歴史の跡よ。よしや、千古に名は朽ちず、功業は炳乎として輝くとは雖、世にもときめく埃及の女皇、千古の容色クレオパトラの軟かき胸に抱かれて、花の如く美しく、烈火の如き情熱の高潮を恣にせる彼れアントニー。吁々、彼や果して啾々たる埃及の原頭、古墳の底に九泉の恨みを吞んで憤るべきか、果た流水瀟々たるナイルの河聲、恒久不變の美の囁きに擁せられて、春月に照らされて安らかに眠るべき乎。さはれ汝美の權化埃及の花よ。汝其の武器の美を誇る事を止めよ。其の武器は英雄アントニーをターレンスの一夕に惱殺せしと雖、そは果して永久に美の勝利者、戀の勝利者として絶大の權威を標榜し能ひしや否や。汝は臆てローマの慕雲を仰いでは泣いてアントニーを戀慕し、狂亂せるにあらずや。汝は汝の美に對する讚美者、渴仰者たらしめんと欲したるアントニーの濃やかなる愛情に絆されて却つて汝彼を愛慕し憧憬する悲しき戀に落ちたるにては非ざる乎。

あはれ弱きは女、強きは真心こもる美しい絶大なる尊き愛の力なる哉。斯くて再び來れるは美しき埃及の春静けき平和と、もの悲しき寂滅の響と、ナイルの河は永き歴史の姿を載せて悠久に流るれども、トレミー宮殿の春の夢は遂に長かるべしとも思はれず。

アリテウムの戦

紅燈綠酒に寫るトレミーの歡樂未だ盡きざるに、もの悲しくも悲哀の暗谷は蕭々として英雄佳人の目前に迫り來りぬ。而も徒らに女皇の妖艶に惑溺して劍も才も一切の大事業をも拋棄しながらも依然として過古の龐大なる勢力と嘖々たる聲名を誇れるアントニーの紅夢は遂に空しき乎。掩留更に淹留の日を重ねて征馬は小

亞の境に進まず。彼が紅閨翠帳の圓らかなる春夢猶は纏綿として盡きざる間に、故國ローマの權勢消長史は滔々として毫も間斷なく旋轉せり。見すや豎子小シーザーの、威望は傲然として加はり市民は口を齊しうして、アントニーの沈溺を誹謗し初めたるにあらずや。彼れにして今立つに非らずんば彼のローマに於ける勢力は香高き女皇の一袖の蔭に消えなんのみ。

時なる哉、小シーザーの使は頻々として踵を接しぬ。曰く、ポンペイの反亂將にローマの海陸を壓せんぞすと。アントニー今は劍を横へ猛然として起たざるべからざる乎。春日遅々として深宮内の獨居、復た昔日の憂愁は悶々として止むべくもあらざるに、あはれ又も紅涙を絞つて思ひ出多き、ローマの空に愛人を送らるべからざる乎。嘗て昔日の愛人シーザーは其の處にて死せり、呪ひ深き地よ。第二の愛人アントニーも其そが陰險なる手に依りて、——思ひ一度其の事に馳せては心緒亂れて糸の如く、蒼茫として天と水を連ぬる地中海を渡つて、アントニーが陣旅に達せし二十余度の飛脚、書き聯ねたる戀々の文字の痕は如何に。

三五夜中新月色。三千里外故人心。月光皎々として廣漠たる埃及の姿を包め共、寂たるクレオパトラ宮、復た故人の面影無く、愛人の魅するが如き微笑、燃ゆるが如き接吻無きを如何にせんや。

「我れに悲しき悲しき音樂を與へよ、悲哀の糧の音樂を與へよ。」「情なきローマよ。仇なる埃及よ。何故に汝は妾の懷より我が最愛の偶像を奪ひ去りしや。」潜々たる涙は糸柳に煙る春雨の憂愁の如く、憤々として悲しむ嗟嘆の聲は烈々たる紅焰の叫びの如く、其の待ち設けたる使者の口より、アントニーが、ローマの名媛オクタヴィアとの結婚の報を傳ふるや、女皇の性質は最もよく發揮せられぬ。見る見る美しき柳眉は逆立ちぬ。怨恨と嫉妬に燃ゆる紫の戀の焰は、烈々として彼女の胸を燒きぬ。

晃々たる叱音を使者の頭上に擬して、「あゝ埃及よナイルの河に溶けて了へ」叫びし形相の如何に凄婉悲痛の悲劇なりし乎。あはれ女皇は情緒に燃ゆる易く、狂ひ易き女の性格の偉大なる凡てを所有し居たる千古の美人たりし也。

然れ共、女皇が自認せる自己の美に對する尊嚴と誇とは依然として彼女より去らざりき。

ローマの平和を維持すべく、小シーザーとの反感を一掃すべく、よしや、アントニーは彼等の請を容れて、小シーザーの妹オクタヴィアと華々しき華燭の典を舉げしとは雖、彼女の貞淑、忍従の清楚なる点は、嘗て濃艶花の如く情花火の如かりし、埃及女皇の軟かき胸に抱かれ、銀盃に綠酒を享けし奔放不羈なる、アントニーの心を縛するには余りに弱き表情にてありき。オクタヴィア美ならざるにあらざれ共、クレオパトラの清艶は更に美なりき。無心なる英雄は美に對する其の情慾を満足せしむべく。清楚なる白百合の姿に飽き足らず、妖紅燃ゆるとするが如き薔薇に向つて再び飛びぬ。

小シーザーは憤然として怒り、ローマの市民は此の放肆極まりなき非愛國的英雄を呪咀しぬ。

あはれ花に行き暮れて歸るを知らざる白日の長樂、埃及の平和なる春を破つて、マークアントニーに對する彈劾書は提起せられたるなり。

鴛鴦の夢、亂れて遂に安らかならず。風雲は暗澹として遂に大颶風を起せるにあらずや。ローマの空より地中海を横ぎつて遙かに一陣埃及の空へ。あゝ。かくて開かるべき乾坤一擲アクチウムの大海戰。曠世に亘る悲劇の序幕は靜々として嚴肅なる乾坤の一方より開き初めぬ。

我は繪を愛す、詩歌を愛す。アクチウムの美しき藝術的色彩に富める詩歌を愛す。顧みれば悠々たり東西三

千年の史。誰か是を舉げて一片の興味索然たる文字の臚列とは言ふや。憐れむべし此の輩は歴史を文字として認識する幼稚なる人間のみ。我をして之を開かしむれば全卷の文字皆悉く、無韻の叙情史となつて、躍る我が心に諧謔するを覺ゆ。彼の基督の垂訓は我が眼前に鐵火の十字を描き、アラビヤの原野より烈々として叫び出されたるマホメットの經典は我が耳に荒れ狂う、快美なる強調の音楽を奏す。喊陽宮殿三月紅、果てはトロイの大火を一夜にして目賭すべく、彼の宏莊華麗なるローマの都を焼き盡さしめたる暴君ネロ皇帝の紅火。我は暴君ネロを惡みて、世にも美しきローマの都が、炎々として天を焦す紅焰の下に、犂々として破毀され行く、大理石の殿堂圓鑄の莊嚴沈痛なる面影。我は實に其の千古見るべからざる壯大なる光景を愛す。見よ、肅々として明け行く黎明の中に、魑て起らんづ慘劇を豫告するかの如き縹たる地平線の亘立、綠なせる地中海の大鏡面を抱いて、ローマは南、埃及は北に横はつて、靜肅の中、而し何物かを、豫期しつゝ、凝視するに似たらすや。靜肅の府には極めて沈痛なる動亂を秘す。忽ちにして銀浪は咽び白馬は奔跳せり、「惡きローマを奈落の底に沈めよ、我等を非難せる彼等ローマ人の紅き舌を糜爛せしめよ」怒れる綠髮風に亂して、莊嚴なる乙女一人、埃及の兵船の舳に立てども。あはれ、刻々として迫り來る運命の宣告を如何せんとするや。唯沈み行く埃及の悲愴なる最後の歴史に、映ゆる夕陽の金光を放てるのみ。女皇の船は轟然として走りぬ。アントニーの船も其の舳に續ぎぬ、薄雲に咽ぶ暗濤の叫。今よ、靜かに閉ぢられんとする終幕のいかに物悲しき印象なりし哉。

美の終焉。

刻まれし胸の瘡痕は遂に醫し得べくもあらず。敗殘の將復た兵を談らずと言はゞ言へ、嘗つては勃々たる功

名の野心に駆られて、赤手以てローマの廻瀾を翻倒するや、傲然たる意氣は虹の如く、フィリッピの野に雄心を戦はしては風稜織の如かりしアントニーが、燃ゆる當年の追憶や如何に。

我を地中海の底深く沈めたるオクタヴィアよ。追へども、追へども去りやらぬターレスの夢よ。トレミーの歡樂よ。生れし故國ローマの空や何處、仰げば漠々たる天涯萬里、我や何故に一身を容るゝ能はざる遁竄の一孤客たらざるべからざる乎。

女皇よ、女皇よ。せめて御身の温かきキッスを給へ。御身が其の眞情オサグある一滴こそは優に我が敗殘の唯一の慰藉なるをや。昨日の姿は遂に今日の姿にあらじかし、迫り來る悲慘の終焉を覺悟しつゝ待つ英雄の心事の如何に傷心の極みなるよ。

勝ち誇りたるローマの軍は今や金鼓寥々と埃及の山河を震撼せしめつゝ、アレキサンドリヤの外壁に迫り來つて、アントニーの殲滅と女皇の捕虜とを宣言しぬ。あはれ、美しき國、華々しき英雄、美しき女皇、美しき歴史、美しき悲劇は今乾坤の一息に葬むらんとす。あゝ埃及の最後の夜よ、あゝアントニーが最後の夜よ。犇々と包圍せるローマ軍の勇ましき劍光に引き換へて、寂たるトレミー宮殿には、これを永久の思ひ出なるべき臨終の饗宴あり。其の肅々として起る奏樂の何ぞ昔日に比して悲哀の曲なるや、錦繡の美室、往古の面影は猶ほ依然として残れども、相擁せる英雄の眉宇に輝きなく、嘗つては薔薇色の玉顔、今は愁然として青白きは如何に樂は止みぬ、明日の決戦に果敢なき運命を疊みつゝ、將士は眠りぬ。立つて錦爛の帷幕を排すれば、夜は暗し、嘗つて其の昔、香はしき花に微笑みし春月の圓らかなる色は無くして。只、靜肅と沈黙と神祕の夜色に包まれて。埃及の今宵は無恨なる永劫の時の彼分へ更け行かんとはする。うたて現世ウシヨの呪

ひの紅花、ローマの軍が焚く篝火は炎々として半天を彩れり。

「今ぞ鐵の如き心もて御身と袂をば分つ也」。さらばとばかり立ちも出でけむクレオパトラ宮殿。仰げば漠々たる天空、星斗影冴えて、埃及は今寂然として敗將の足下に横はれり。山河余情あり、何ぞ夫れ人のみならんや。

あはれ、悲歌よ、哀詩よ、悲しき音曲よ。

滾々として進む血潮を紅の花とや見て、せめて最後の戀の斷末魔を、美しき女皇の胸に抱かれて、彼の永遠の寂空に、怡樂の園を想ひつゝ、靜かに眠らんと思ひしものを、孤身重圍を破つて歸り見れば其處には我が永久の死を受け取るべき女皇の姿はあらざりき。

「何、自殺とや、我が尊き女皇、我が貴き炬火は消えたり」白刃は遂に流血と共に閃きぬ。三寸の息空しく絶えぬれば、英雄の功業もあはれ、一炊の夢に若かざりにき。

あはれ、英雄の面影はナイルの水と共に永劫に逝き、詩に美しき國、埃及の亡滅も今は近し。墓に花を、花にキツスを捧げて咽ぶ女皇が最後の痛ましき述懷を聽け。

「此の手にて——此の手にて君を埋め參らせしを、今は此の手も自由ならず。捕はれて遠き國に行く程もあらねば、此の手にて君が墓を拂ひ、此手にて香焚くべき折々の長へに盡きたりと思ひ給へ。生ける時は莫耶も我等が間を割き難きに死こそ無慘なれ。ローマの君は埃及に葬むられ、埃及なる我は君がローマに葬むられんとす。

君がローマは我が思ふ程の思を憂き我に拒める、君がローマはつれなき君がローマなり。されど情だにあら

ば、ローマの神はよも生きながらの辱に市に引かると我を雲の上より他處には見給はざるべし。君が仇なる人の勝利を飾る我を、埃及の神に見離されたる我を、君が形見を残し給へる我が全てこそ仇なれ。情あるローマの神に祈る。我を隠し給へ、恥見ぬ墓の底に、君と我とを永劫に隠し給へ。――

花を墓に、墓に口を接吻して、今ぞ女皇は最後の終焉を願はんとはする、シーザーに送れる文に曰く、願はくば、アントーニーと同じき墓に我を埋め給へと。緑濃き無果實の葉蔭、あゝ其の薄暗き葉蔭にこそは、ナイルの泥に炎々たる焰の舌を冷したるアプスの毒蛇は、凄くも渦を卷きつゝ潜み居るにあらずや。無果實の葉は遂に拂はれぬ。アプスの紅蓮と燃ゆる焰の舌は惜氣もなく、此の純白なる大理石の如き女皇の肌を噛みぬ。

あはれ、莊囀にも亦美しき美人の終焉なる哉。見よ、金光燦然として輝き渡るベッドの上、花の如きローマの榮華の歴史と物悲しくも亡び行く埃及の痛ましき姿を載せて、泉下に眠る英雄の永き記憶を抱きつゝ、月暗き夜の露を集めて、千顆の珠を飾りなせる美しき冠よ、埃及女皇の莊嚴なる装を今日を晴と凝らしつゝ、眠れるが如く笑めるが如く。千古の容色クレオパトラ女皇が、美しき死骸は花の如く横はれるにあらずや。

(大正四、四、一五)

失意の友STに與ふ

一、三、甲一

三

浦

生

再啓早速委細なる御返事被下れ難有く愉快に讀過仕り候。漸く初夏の候と相成り申し候處兄には益々御壯